



はあもに

令和7年9月1日発行
●社会医療法人創和会広報誌はあもに / 発行 理事長 重井文博

ウェルビーイングの高い組織を目指して

しげい病院 看護部長 守屋 由美



このたび本年9月よりしげい病院看護部長を拝命いたしました守屋です。身に余る大役に責任の重さをひしひしと感じております。しげい病院に就職し31年、本当にたくさんの皆様に支えていただいたおかげで今の私があると思います。この場をお借りし心より感謝申し上げます。

いま医療を取り巻く環境は大きく変化しており、物価高騰、超高齢化社会の進行や医療の高度化、また働き方の多様化、人材確保困難等多くの課題を抱えています。看護の役割も多様となり、きめ細やかなケアが求められる一方でスタッフの心身の健康やワークライフバランスを守る体制作りも重要です。

今年度しげい病院の基本方針に「人の和を大切にし、職員の自己実現とやりがいを育む」が新たに追加されました。多種多様な立場と考えを持っている職員同士が、お互いの立場や考えを尊重し相手を思いやる。そのためには、コミュニケーションが欠かせないと思います。相手を知ること、相手に興味を持つということ。そして合意し同じ方向を向いて進んでいく。こんな時代だからこそ職員が一丸となって、認め合い支え合うチームとなり、同じ方向を向いて力を合わせ前進していくことが何より大切であると考えます。

そのために、ひとりひとりが「自分らしく生き生きとやりがいを持って働き続けられる」ウェルビーイングな組織作りをすることが自身の役割だと考えています。ウェルビーイングとは、身体的、精神的、社会的に満たされた良好な状態を意味する言葉です。職員が生き生きと笑顔で働いている、職員のやる気が高まりより定着率が向上する、職員同士良いコミュニケーション環境が整っている等、職員の満足度向上につなげることができるよう尽力して参ります。

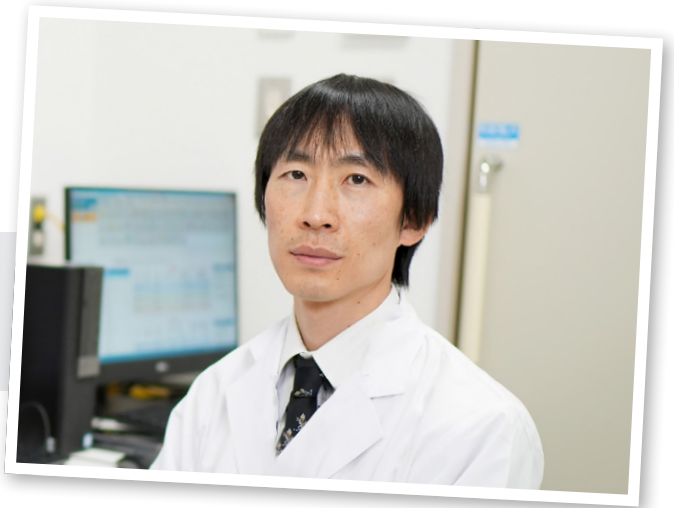
これからの医療・看護は、「治す」だけでなく「その人らしく生きる」を支えることが求められています。患者さんの人生や背景に寄り添い地域の多職種と連携しながら、地域に根ざした病院として切れ目のない医療・看護を提供していきたいと思っています。質の高い看護を提供するためには、職員自身が心身ともに健康である、まさにウェルビーイングな状態が必要であると考えます。

患者さんご家族にとって、そして働く職員にとっても「しげい病院でよかった」と思えるウェルビーイングな組織作りを目指し、これからもポジティブ精神を忘れず何事にも前向きに取り組んでいきたいと思っています。今後ともご指導・ご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

この人紹介 !!

森廣俊昭先生をご紹介します！

2025 年 4 月から重井医学研究所附属病院に勤務されています。



今までどのような医療をされてきたのですか？

岡山大学医学部を卒業後、県北の津山中央病院で2年間の初期臨床研修を行いました。外科を志望し、後期研修は山口県の国立病院機構岩国医療センターで行いました。どちらの研修病院も地方の中核病院であり、忙しかったもののとても良い経験になったと思います。その後は岡山大学に戻って大学院生になり、3年間の研究生生活を送りました。細胞を培養したりマウスで実験したり、読みきれない文献を調べたりと、なれない研究生生活でしたが無事に学位を取得して大学院を卒業できました。その後は臨床に戻り、香川労災病院、そして岡山労災病院で消化器外科を主に一般外科の診療にあたってきました。2025 年 4 月から重井医学研究所附属病院でお世話になっています。

休日の過ごし方は？

いきもの好きの小学生の娘が、いろんないきものを捕まえてきます。虫や魚、トカゲやヤモリ、カメ、イモリにカエルなど、どんどん増えてくるのでそのお世話をしています。最近は用水路に転落しているヘビ（毒ヘビではありません）を発見し、救出して連れて帰ってきました。自分は岡山県備前市出身で、子供のころはよく外で遊んでいきものを捕まえたりしていました。でもその当時はあまり知識もなく、本格的な飼育はあまりでき

ませんでした。大人になって改めて採集や飼育をしてみると、童心にかえったようで楽しく、また新しい発見も多いです。小さいいきもの達ですが、それぞれ個性的な行動やしぐさが見られて面白いです。さらに先日は民家の屋根裏から落ちてきた子猫を保護したため、猫も飼うことになりました。

その他の趣味として、車が好きで、以前は暇さえあれば車いじりをしていました。大がかりな整備以外は自分でやってみて、整備ついでに部品交換を進めています。やりたいことはまだまだあるのですが、最近は忙しく、なかなか車いじりの時間がとれていません。時間を見つけてまたやっていきたいです。

重井医学研究所附属病院での抱負をお願いします！

重井医学研究所附属病院に来てからは、主にシャント関連・血管外科の診療や手術を日々行っています。これまで自分が担当してきた消化器外科とは異なる分野ですが、少しでも皆様のお役に立てるよう精進して参りたいと思います。入院患者さんには消化器外科術後の患者さんも多くおられ、これまでの経験を生かして診療にあたっています。今後ともよろしくお願いいたします。



ヤモリ



ヘビ

カエル



ネコ



肝腎かなめの リハビリテーション講座 開設について

しげい病院 リハビリテーション部 主任 清水 賢児



▲川中先生（写真中央）

この度4月より、川中美和先生（岡山大学 医歯薬研究域 消化器肝臓内科 肝腎リハビリテーション（運動療法）連携推進講座 特任教授）としげい病院、はあもにい倉敷が共同して「肝腎かなめのリハビリテーション講座」開設に向けて準備して参りました。この講座のメインターゲットは日本人の3人に1人とされている脂肪肝です。脂肪肝は、お酒を飲まなくても進行し、肝硬変や肝臓がん、心筋梗塞・脳梗塞のリスクも高くなります。脂肪肝や慢性肝炎（非アルコール性肝疾患）は、糖尿病や肥満などに伴うことが多く、筋肉は第2の肝臓と言われていることから運動することで筋力や筋肉量を維持することが脂肪肝の進行を抑制し状態改善に有効であることがわかってきました。しかし、脂肪肝で受診すると、運動と栄養を組み合わせるようと言われて十分なフォローがされないケースが多くあります。そのような中この講座では、肝臓疾患の専門医の川中先生がしっかりと脂肪肝について検査・評価（FIB4-Index）し、多職種の専門チームの介入や、はあもにい倉敷で積極的に運動して頂くことで、脂肪肝の改善を図ることができる講座となっています。

また、心リハや内部障害の経験豊富な熊代副院長もチームに入ってくださり、必要に応じてCPX（心肺運動負荷試験）の実施、運動負荷量の助言など、運動面でのサポートをして頂く予定になっています。手

探りの状態で整っていないところもありますが、少しずつチーム医療を行っていき、患者さんの治療につなげていければと思います。最後に、職員の方も検診等の結果によって、講座を受講して頂き一緒に脂肪肝を改善していければと思いますのでよろしくお願いします。



▲多職種でミーティング



▲多職種チームメンバー同

初めてのドローン空撮！ 空から見た幸町記念病院

幸町記念病院 事務部 矢吹 静香

▲栗原さんがドローンを使って撮影



このたび、幸町記念病院の魅力をより多くの方に、さまざまな角度からお伝えすることを目的に、初めてドローンによる空撮を行いました。撮影にあたっては、重井医学研究所附属病院 企画課の栗原さんの全面協力で、航空法に基づく申請や飛

行許可など、必要な手続きをすべてご対応いただいた上で、安全な環境のもと、無事に撮影することができました。撮影場所としては、近隣のマルナカ様にご協力をいただき、屋上スペースを使用させていただきました。



▲空撮映像

使用したドローンは手のひらに収まるほどのコンパクトなサイズであり、初めて目にした私は、その小ささと高性能ぶりに大変驚かされました。栗原さんはスマートフォンと接続した専用のコントローラーを使って操作され、映像をリアルタイムに確認しながら、非常に滑らかに飛行させていました。風の影響を受けながらもドローンは空中を自在に移動し、病院の外観や周辺の風景を鮮明に映し出す高画質の映像が撮影されました。

今後、この貴重な空撮映像を広報活動に活用し、より多くの方に当院の魅力をお伝えできればと考えております。

北倉庫から“お宝”発見！

創和会本部 人事部 副部長 田中 昭彦

“野村式人工気胸器”なる物がしげい病院の北倉庫内に保管されていることが分かり、製造元の株式会社杉山元醫理器製作所（現：株式会社スギヤマゲン）に問い合わせたところ、「野村式人工気胸器」は弊社の「礎」ともいえる製品ですので、もしよろしければ弊社にてお引き取りをさせていただきたく存じます。とのお返事をいただきました。

記録的な暑さがつづく、7月25日（金）15:30



▲杉山社長に“野村式人工気胸器”についてのお話を伺いました

ごろ、遠路、東京より代表取締役の杉山竜介様が到着され、無事引き渡すことができました。

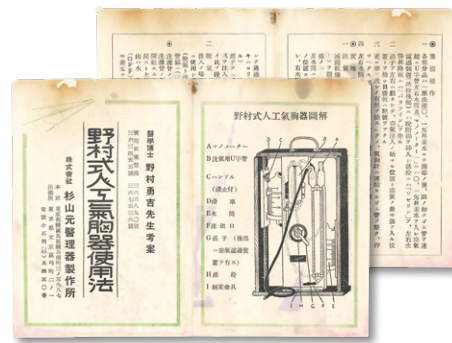
杉山社長のお話では、現在社

内に1台だけ小ぶりの人工気腹気胸器がある

のみで、今回北倉庫から発見された製品は初めて見るとのことでした。株式会社スギヤマゲンの会社沿革の最初に掲載されている逸品で、この製品があったから戦中、戦後の苦しい時期もなんとか乗り切ることができたと仰っていました。

野村式人工気胸器は肺結核患者さんの治療に使われていた医療器具とのことで、重井内科診療所が開設された当時はそのような分野の治療も行っていたことが窺えました。

株式会社スギヤマゲン様にとって、貴重な資料をお渡しできたことは、創和会にとってもとても喜ばしいことです。



▲野村式人工気胸器使用法

猛暑の夏だけど、夜の植物園には発見がたくさん！

重井薬用植物園 園長 片岡 博行

7月26日（土）19～21時、毎年恒例になっている倉敷昆虫館と重井薬用植物園共催の観察会、「みんなでたんけん！夜の昆虫観察会」を開催しました。講師は、昆虫館の岡本館長と職員の小橋さんのほか、ボランティア講師として、倉敷昆虫同好会の末長晴輝氏と倉敷市立自然史博物館友の会会員の方1名にお手伝いいただきました。今年は開催日が「倉敷天領夏祭り」の開催日とかぶってしまい、参加申込みに影響が出るかと心配していたのですが、受付開始から3日で50名の定員に達して受付を締め切ることとなりました。開催当日に数組のキャンセルがあり、最終的な参加者数は少し減って42名となりましたが、そのうち小学生以下の子供はおよそ半数で、賑やかな観察会となりました。

植物園内は、6月末から連日猛暑が続き、ほとんど降雨もなかったため、例年に比べても特に見かける昆虫の種類が少なく、日中は木陰でも蚊も出ないような状況でした。開催当日は日中こそ猛

暑日でしたが、日没後は気温も下がり、少し風もありましたので、湿度もそれほど高くなく、比較的過ごしやすい夜となりました。ただ、昆虫が活動しやすいのは湿度、気温ともに高い熱帯夜のような条件なので、昆虫観察の条件としてはあまりよろしくなく、さらに、梅雨頃には園内でも何本が見られた樹液が出ていた木も少雨による乾燥のため、樹液が止まってしまっていたので、正直なところ、かなり気を揉んでいました。

「探検」の結果としては、カブトムシやクワガタなどはほとんど見つからず（それでもコクワガタを見つけた子がいました！）、少し盛り上がりには欠けることになるかと思いましたが、なかなかのサイズのシロスジカミキリが2匹見つかったほか、1週間ほど前までは抜け殻もほとんど見つからなかったアブラゼミの羽化も数ヶ所で観察することができました。子供たちからは「楽しかった！」との感想を今年も聞くことができ、企画側としてもうれしく思っています。



▲大きなシロスジカミキリが見つかりました。



▲ヤマコウバシの枝を参加者が囲んでいます。何か見つかったでしょうか？



▲羽化中のアブラゼミ！観察会中にどんどん殻から抜け出してきました。



▲ライトトラップの光に集まった昆虫に集まる子供たち。

「おかやま SDGs フェア 2025」に 重井薬用植物園と倉敷昆虫館が出展しました。

創和会本部 人事部 係長補佐 松田 圭市

2025年8月7日（木）・8日（金）、岡山コンベンションセンターで「おかやま SDGs フェア 2025」が開催されました。県内の企業・団体がSDGs達成に向けた取り組みを紹介し、来場者と交流するイベントで、2日間合計で延べ3,500人が来場しました。岡山コンベンションセンター全館を貸し切り、産業、暮らし、自然をテーマにした多彩なブース出展、屋外には民間救急車や高所作業車の展示、ステージでは講演や発表が行われていました。

創和会は以前から地球温暖化防止や自然環境保護の活動を続けており、直近の1年だけでも重井医学研究所附属病院にソーラーパネル設置、しげい腎クリニック早島ではヒートポンプ設置や護岸整備を行いソーラーパネルも設置中です。また、重井薬用植物園は日本自然保護大賞を受賞しました。こうした活動を広く知ってもらうため、今回初めてSDGsフェアに参加し、「身近な自然を守り残すために」をテーマに重井薬用植物園と倉敷昆虫館で共同出展しました。ブースでは岡山県内の希少植物や「岡山県版レッドリスト」掲載の昆虫、「フサヒゲルリカミキリ」の標本、山焼き装備を展示しました。

蒜山高原の草原の保全活動を行っている「蒜山自然再生協議会」に重井薬用植物園も参画してい



▲屋外展示 民間救急車
(おかやま笑顔プロジェクト)



▲現在は蒜山地域にしか生き残っていない「フサヒゲルリカミキリ」はユウスゲを唯一の食草としており、山焼きはユウスゲが生育する草原環境を維持するための伝統的な方法です。

るのですが、創和会ブースの近くにあった真庭市ブースには、実際に山焼きで交流のあった方も参加しており、自然保護活動のつながりを感じる場面が多々ありました。また、産業エリアでは、広報誌はあもにい制作でお世話になっている友野印刷株式会社が廃材を使った紙漉き体験を実施し、多くの来場者が楽しんでいました。

今回の出展を通じて、重井薬用植物園や倉敷昆虫館の自然保護や地域活動を多くの人に伝えることができました。今後も創和会は、医療・福祉にとどまらず、地域の自然や生き物を守る取り組みを続けてまいります。

※フサヒゲルリカミキリの標本展示に当たっては環境省の許可を得ています。



▲会場の様子（創和会ブース周辺）



▲隣接ブース（日本植生、真庭市）の方々との記念撮影

はあもにい倉敷と重井医学研究所の コラボ企画が開催されました！

はあもにい倉敷 ベネッセ英語チーム 岡田 美帆



科学に興味がある子供たちを対象にした夏休み特別イベント「夏休み 重井医学研究所 実験&見学ツアー」が、8月6日（水）と8月9日（土）、重井医学研究所にて開催されました。

参加したのは小学生を中心とした子供たちとその保護者です。英語教室（ベネッセの英語教室 BE studio はあもにい倉敷校）に通ってくれている子供たちもたくさん参加してくれました。重井医学研究所の松山誠先生の指導のもと、たまねぎやブロッコリー、ほうれん草等、子供たちの持参した野菜から DNA（遺伝子）を取り出す本格的な実験に挑戦しました。

子供たちは、野菜を細かく切ったり、スポイトを使ってエタノールを入れたり、実験に集中して取り組んでいました。そして身近な野菜から目に見える形で DNA が現れると、子供たちと保護者も驚き、科学の面白さに目を輝かせていました。

実験に加えて、普段なかなか入ることのできな

い研究所の見学も実施されました。がん細胞を顕微鏡で観察したり、実験で使用するマウスを間近に見たりすることで、科学者の仕事や医学研究への理解を深める貴重な体験となりました。

質問の時間では、子供たちから次々に質問が飛び出し、「DNA は果物でも取れますか？」や「DNA は物によって違いますか？」など、一生懸命聞いていました。松山先生は質問に対して一つ一つ丁寧に回答してくださり、学びを深めることができました。

身近な野菜から目に見えるように遺伝子を取り出すという体験は、子供たちにとって科学をぐっと身近に感じる大きなきっかけになりました。

今回のイベントに帯同させていただき、英語教室で見せてくれる子供たちのいつもとは異なる表情を見ることができて、新鮮で頼もしく感じました。この夏、子供たちとの楽しい思い出が増えて、とても嬉しいです。ありがとうございました。

集中して
頑張ってます！

DNA が
取れました！

催し物案内

重井薬用植物園

植物園を楽しむ会

「木染月（こぞめづき）の
木陰を楽しむ」

日時：9月13日（土）
8：00～10：00
会場：重井薬用植物園



編集後記

●今年の夏は、友人と一緒に愛媛県でキャニオニングに挑戦してきました。キャニオニングとは、渓谷を舞台に岩場の天然ウォータースライダーを滑ったり、滝壺に飛び込んだりと、全身で自然を楽しめるアクティビティのことです。私にとっては初めての体験でしたが、想像をはるかに超える爽快感とスリルに大興奮！特に印象に残っているのは、「日本の滝百選」にも選ばれている、雪輪の滝を滑り降りた瞬間です。岩の冷たさや水の透明さ、渓谷を吹き抜ける風の心地よさが五感を刺激し、大自然と一体になれるような感動を味わいました。チャレンジする勇気や言葉では言い表せない感動を肌で感じられ、心も体もリフレッシュできました！皆さんもぜひ遊びに行ってみてください。（DY）

●皆さん、暑い日が続きますが、いかがおすごしでしょうか。7月はじめに趣味であるエギング（イカ釣り）にしまなみ街道の島々へ行ってきました。今年は自己記録である900gを大きく上回る1.6kgのアオリイカを釣り上げることができました。目標としていた1.0kgを超えたこともあり、釣り上げた時には手が震えるほど感動しました。来年は2.0kgを超えるアオリイカを釣ることを目標として頑張りたいです。釣りをしている間はすべてのことを忘れ釣りに集中できるため、ぜひ皆さんも釣りを初めてみてはいかがでしょうか。（TY）

EAP相談室コラム

「正常性バイアスと確証バイアス

～行動経済学を役立てよう その5～

ジャパンEAPシステムズEAP相談室

前回の「行動経済学を役立てよう その4」では、私たちは動物的な心（象）と分析的な心（象使い）を持っているという話をしました。「象」は働き者ですが本能的で力が強く、損をするのが嫌いで自分のことが好きで、せっかちで面倒くさがり屋です。そして情報を歪んで解釈する習性があります。これを「認知バイアス」と呼びます。今回は正常性バイアスと確証バイアスを取り上げます。

●正常性バイアスとは

正常性バイアスにご存じの方も多いかもかもしれません。たとえば台風による大雨の警報が出て避難勧告も出ているのに、「過去50年、この川は氾濫したことがないのだから大丈夫」と言って避難しようとしなかったり、「少しは水があふれてきたかもしれないが、もう少し様子を見よう」と言ったり、すでに床上まで浸水しているのに、「溺れることはないから大丈夫だ」と逃げようとしなかった、といった報道に触れたことがあるのではないのでしょうか。あるいは今回のコロナ禍で言えば、「コロナはただの風邪」、「自分はコロナにはかからない」などという言説も正常性バイアスの典型です。私たちの心の中の「象」は事態を客観視するのを面倒くさがり、自分の感覚を過信してしまうのです。「自信過剰バイアス」とも言えますし、「楽観性バイアス」とも言えます。

●確証バイアスとは

情報を確認しないのが正常性バイアスなのに対し、自分が気になるもの、信じたいものに合う情報を選んで集めてしまうことを「確証バイアス」と言います。心の中の「象」は、批判的な意見も確認するような面倒なことをしないのです。コロナが始まった当初、コロナで何十億人が亡くなるという情報を信じてしまい、家から出られなくなった人がいました。あるいは「コロナウイルスは生物兵器だ」とか、「ワクチンにマイクロチップが入っている」などのいわゆる陰謀論も確証バイアスの一種と言えるでしょう。ある情報に注目してインターネットで調べていると、似たような情報ばかり目に付くようになる「フィルターバブル」（情報の泡の中に孤立する状態）と呼ばれる状況が起こり、ひょっとしたら本当では？と思いはじめます。そして似た考えを持った人たちが集まり情報交換するようになると、より確信度が高まる「エコーチェンバー」（狭い空間で音が反響するように、同じ意見ばかりが繰り返し強化される現象）を起こします。さらに批判的な言説や論文は無視し、自分たちの考えに合う情報だけを集める、「チェリーピッキング」（熟れたサクランボだけ選ぶ）という行動を取ることで、ますます確信が高まるわけです。

人の命に関わるような重大な事柄は、動物的な心ではなく分析的な心で冷静に考えねばならないと思います。周囲のアドバイスに耳を傾け、立ち止まる冷静な心を忘れないようにしたいですね。

執筆者：米沢 宏（ジャパンEAPシステムズ顧問医）

※社会医療法人創和会は職員の心の相談窓口として、ジャパンEAPシステムズと契約しています。相談はお気軽に、電話やメールで。



社会医療法人 創和会グループ

WEB版はこちら。
バックナンバーもご覧ください。➡



- しげい病院
- 重井医学研究所附属病院
- しげい腎クリニック早島
- 医療法人 三祥会 幸町記念病院

- 倉敷しげい訪問看護ステーション
- 倉敷しげい居宅介護支援事業所
- 岡山しげい訪問看護ステーション
- 岡山しげい居宅介護支援事業所

- 重井医学研究所
- 健康増進施設 はあもにい倉敷
- 重井薬用植物園
- 倉敷昆虫館